

私たちの今の平和な暮らしは、六十余年前のあの悲惨な現実の生活の上に築かれたものです。あのときには、「もう戦争は絶対にしてはならない」と、みんなが心に誓っていたはずです。

今の平和を獲得するまでに、どれだけの命がアジア各地の野や山に失われていったことか、生きる糧さえもらえなかった、幼い命。

そのときにはこれが最高と教えられ、家族への切々たる思いを胸に秘めて、前途ある若い命が散っていった戦争の悲惨さ、いつまでも私たちは伝え続けていかなければならないと思っています。

警察官家族の運命

大分県 松尾 イサ子

一 新米教師の誕生

北朝鮮咸鏡南道の咸興公立高等女学校を、昭和十九（一九四四）年の三月に卒業した私は、四月に官立元山女子師範学校に入学し、翌年の三月に卒業する一年を国民学校の教師としての勉強をした。

卒業後は新米教師として、咸興より少し北の洪原邑の前津国民学校に赴任したが、ここは朝鮮人の国民学校であった。当時は後で考えると戦争末期であったが、そんなことは知らず子供たちは生き生きとしていて、軍歌を歌って登校して来た。どの子供もかわいらしく、私は教師になった喜びをかみしめていた。五、六月ごろになると、一段と戦争の激しいニュースが伝えられるようになってきたが、私たち教師は子供たちを励ましなが

勤勞奉仕などに一緒に汗を流して働いていた。

当時、父は同じ洪原邑の警察署長をしていたが、突然七月に咸興南道庁の警察課勤務という辞令を受けて、咸興府に移ることになった。「教師とは言えども、女を朝鮮の田舎村に一人残しておくわけにはいかない」という家族一同の意見によつて、私も父と共に咸興府に転出を命じられて、前津国民学校を去ることになった。たった三カ月余りの師弟としての出会いだったが、朝鮮人の子供との涙の別れを今も忘れることができない。

咸興での私の新しい着任校は、私の出身母校の咸興公立国民学校で、ここは日本人小学校だった。校舎そのものは、昔と変わらぬ煉瓦建てで堂々としていたが、私が校舎に入って驚いたことは、最後の本土防衛の任務につく、北満から転進して来た兵隊でいっぱいだったことだ。大部分の生徒は近くの町の集会所にいて、一部の生徒は国民学校の裏手にある高等女学校の教室に入っていた。校舎内には、一人の生徒も見受けられなかった。

登校第一日の七月十四日、裏手の高女の教室で、校長先生から「三年竹組の担任を命ずる」と発令を受けた。竹組は男子組だった。かつて私が学んだ音楽室が、私の担当学級の教室であった。そのころはまだ咸興市は空襲はなかったが、警戒警報のサイレンは度々鳴り響いた。真夜中でも警報が出ると、私は学校へ走った。昼間に警戒警報が鳴ると、生徒を校舎に集めて裏山の防空壕に避難させた。夏になったある日も、家庭学習の点検中に警報が出て防空壕に避難したが、爆撃もなく解除となり全員無事でほっと安心した。しかし、そのときは既に日ソ中立条約を一方的に破棄したソ連軍が、朝鮮の北の都市、清津や羅南に侵攻していた。学校内の若い男子職員は、ほとんど召集を受けて次々と入隊して、学校を離れていた。残った女子職員だけでは心細い思いだったが、なんとも致し方なく、頑張るしかなく国家の危機存亡にかかわる非常時であり、新米教師もモンペ姿できびきびと活動した。

二 八月十五日を迎えた

「今日は正午に、重大ニュースがラジオで放送されるから、全員聞くように」という知らせが朝からあった。昼前に校庭にラジオを持ち出し、職員、生徒はもちろん、駐屯している兵隊さんたちもみんな集まった。正午、天皇陛下の玉音放送が流れてきたが、空中状態が悪いのか、途切れ途切れでよく聞こえずに、全体の理解ができなかった。しかし「日本が無条件降伏をした」「日本が負けた」「もう戦争が終わった」ということは断片的ながら理解できた。だが、すぐに「今からどうなるのだろうか？」という不安で、頭の中はいっぱいになっていた。そばにいた兵隊さんの中には、「どうして最後まで戦わないのだ！」と、悔しさのあまり大声で怒鳴っている人もいた。後で聞いた話では、隣の学校では日本刀でラジオを真二つに切った兵隊さんがいたそうだ。校長先生の指示で、生徒を急いで帰宅させ、私たち職員は自宅待機となった。

咸興市街では、「日本負けた！ 日本負けた！」

と、大声を出しながら練り歩く朝鮮人がだんだんと数を増し、解放独立の喜びを発散していたが、弱者の引け目からか、なんとなく日本人に対して冷たい態度を感じた。その中には、私たち日本人に対して石を投げたりする者もいたので、日本人はできるだけ屋外に出ないように心掛けた。

三 重要書類の焼却

路地の奥まった所にある我が家は、表通りからまっすぐに正面玄関が見えていた。正面から侵入されると危険なので、玄関をびったりと閉じて、裏門から出入りすることにした。終戦直後、すぐに朝鮮保安隊が創設されたが、そこからの命令指示で、日本人はラジオを聴くことが禁止されてしまった。日本がどうなったのか、朝鮮に居留する日本人はどうしているのか、などの情報が一切途絶えていた。

道庁警察官だった父は、終戦後の残務処理のために、八月二十日まで道庁に詰めていた。終戦直

後から、道の各官庁事務所の庭の広場などで重要書類を焼却する仕事が始まり、咸興市内には黒煙がもくもくと何本も天空に流れていた。各官庁には、後日敵国や植民地として治めていた、朝鮮の人々には見せられない種類が山のごとくにあり、それが連日のごとくに燃やされた。書類焼却の大仕事が一段落して、父が家に戻って家の中に籠もり、家族と過ごしていた。ある日「警察の証拠になるような物が残っていると、どんなにひどい目に遭うか分からないから」と、ぼつりと言っていた。家でも、書類や警察関係の制服や物品を、夜遅くまで一人でこつこつと炊事場の焚き口において燃やしていた。保安隊による家屋捜査時のことを予想して、万全の準備をしていたのだった。

四 家族揃って帰国の夢

父はその一方では、父の故郷に家族全員で無事に帰れる日も考えていた。父は母に、今までこつこつと故郷に送金を続けていて、土地を買っていたことを母に話した。そして「大分県に戻

って、百姓をするのだ。米は何反、麦は何反にしようか」などと帰国してからの生活再建の夢を、熱気を込めて毎晩のごとく私たちに語ってくれた。朝鮮人の不気味な動きの中で、治安がだんだんと悪化しているとき、父の日本に帰ってからの計画は、私たち家族にとっては明るい希望となった。

銀行は封鎖され、ラジオも聴けず新聞も読めない日常の私たちの生活では、人のうわさ話が唯一無二の情報源であった。あちらこちらから、「元警察官のだれだれが連行された！」などという話が、耳に入ってくるようになった。父のことを家族のみんなが心配して、あまり姿を外にさらさないようにと気を遣っていた。

五 ソ連軍の進駐

終戦後一週間目に、とうとう咸興市街にもソ連軍が進駐して来た。軍用トラックに薄汚れた軍服を着たソ連兵を満載して、どつと入って来た。この兵隊は、囚人兵のことが伝えられた。女、子供は見るのも怖くなって、みんな家に引き籠もつ

て隠れた。咸興府の主要な建物は、すべてソ連側に接収された。しばらくすると、街中で頭を丸坊主にしたソ連兵が横行し始めた。

九月十日のことだったが、学校に出るようにとの連絡があつたので、久しぶりに学校に行つた。その日は不思議に静かな朝だつた。私は戦争に負け、ソ連軍が入つて来た現実をすっかり忘れて、何も考えずに校舎の土間に入ると、突然入り口でソ連兵から銃を突きつけられた。びっくりした私は肝をひやし、はっと正気に返り、慌てて校庭を横切つて校長官舎に逃げ込んだ。この日は、集まつた先生方と、それぞれの受け持ちの生徒の在学証明書を作成したが、「日本に帰つてから役に立ちますように！」と心を込めて作つた。

北の方から避難して咸興の街に入つて来た日本人避難民は、街中のお寺、料亭、遊郭など大きな建物に収容されて、集団生活をして帰国の日を待っていた。この避難民は、みんな着の身着のまま、戦場と化した自分の家を飛び出して、逃げ延

びた人たちであつた。そのために、日々の生活は大変な苦勞があつた。その上、これらの人々を狙つて、ソ連兵が毎晩のごとくに襲い、強奪を重ねていた。そのうちに女性を追い回すようになり、彼らの牙から逃げ遅れた人が、多数犠牲者となつた。女がいる家に目星をつけて襲つて来るので、女性は屋外に出なかつた。我が家でも女の子が多いので、父は毎晩玄關の部屋に座つて見張り番をして私たちを守つてくれた。「何が起こつても絶対に顔を出すな！」と厳しく言われ、日中でもちよつとの間窓から覗いたりすると、強く叱られた。

ある日、月の明るい夜だつたが、夕食が終つたころ、「助けて！ 助けて！」という女の悲鳴が、近くの二階家の方から聞こえてきた。窓を開けて見ようと、窓辺に近寄ろうとしたら、父が「開けるな！ 電灯を消せ」と、押し殺した声で言つた。

それでも、好奇心から真つ暗な部屋のカーテンの隙間から外を覗くと、すぐ隣家のベランダに人影が見えた。何か分からないが、人のひそひそ声

聞こえる。どうなることかと息を潜めて見ていたが、そのうちに人影も見えなくなり、声も聞かれずに静かになった。その後、河合さんが話してくれたが、その夜「班長さん宅の裏木戸から『河合さん!』と呼ぶ声がしたので、河合さんが戸を開けたら、一人の朝鮮人が、ロスケを連れていた。すると、突然にそのロスケが奥さんに襲いかかった。とっさに奥さんが、そばの乳飲み子を抱えて二階に逃げた。ロスケが追いかけて来たので、逃げ場のなくなった奥さんは子供を抱えて、隣の家のベランダに飛び移り逃げたが、最後には銃を突きつけられてしまった。奥さんは『この子供と一緒にに殺せ』と、手真似でわめいて座り込んだ。ソ連兵はしばらく銃を突きつけていたが、舌打ちをして帰って行った」ということだった。一メートルも離れていない二階のベランダを、子供を抱えて逃げ回った奥様の話に、戦慄を感じた。街のあちらこちらで女性が襲われ、中には不幸にも殺された人もあった。このころから若い女性は髪を切

り、丸坊主にして男装した人が多くなった。

六 警察官の調査開始

八月の終わりごろ、保安隊が「この辺りに警察官がいるはずだ」と言って、近所に聞いて回った。すると、オモニさんが「ここにはいない。違うよ」と言って、裏の方に連れて行ってくれたことで父は一難去ったが、油断はできない日々が続いた。その後、「北の町では元警察官が銃殺された」とか、「西の町の田中巡査部長は逮捕された」とか聞えてきて、警察官に対する風当たりが強くなったのに、私共は怯えた。ただ一人、近所の優しいオモニは、後々まで日本人に親切にしてくれた。

九月になって、咸興市街の中央に「咸興日本人世話会」が発足した。元の町内隣組の班長さんを通じて情報が伝えられ、連絡が取れるようになった。

日本人の初仕事に、北方の国境地帯の清津や会寧からの避難民が続々と入って来て、病人の藁布団作りに日本人婦人会が奉仕した。しかしソ連兵

の進駐で、日本婦人は我が家が危険になり、奉仕作業は長くは続かなかった。

七 日本人男子は全員拘束

下旬に次のような保安隊命令が出た。「日本人の十八歳以上の男性は全員、北の市民グラウンドに集合せよ。違反者は検挙する」父も参加したが、咸興中の壮年男子は鉄条網に囲まれたグラウンドに抑留されたままで、家族は心配するだけであった。暗くなつて、解放された父が帰宅した。父の話では、「家宅捜査で、ソ連兵の兵營の方向に敷かれている水道管に、日本人が毒物を入れたという疑いで、今日一日日本人を拘束した」という説明があったそうだ。父は言葉を添えて、「関東大震災のときに、朝鮮人が井戸に毒を入れたという流言蜚語に、日本人が在日朝鮮人を虐殺したことへの仕返しと思う。日本人への嫌がらせで、一日中グラウンドの草原に座っていた。それにしても、昼ごろを過ぎるとグラウンドの外側に朝鮮人の物売りが来て、朝鮮飴や餅を売った。我慢すれば良いのに、我先

に日本人が買い求めて食っていた。情けない日本人の姿だった。戦争に負けたとはいえ、日本人の誇りで行動して欲しかった」と嘆いていた。

我が家では、窓下の小屋で三羽の鶏を飼っていた。ある夜、一羽盗られた。同一人物が再度鶏泥棒で来たとき、父に説得されて帰って行つた。その人は日本人難民で、お金も食べる物も無い気の毒な人だった。私たち咸興在住者と、北からの日本人難民との困窮の差が、このころから段々ひどくなつてきたが、どうすることもできなかった。

私共も収入がないので、家財で金になる物は次々に売った。以前から懇意にしていた金さんに頼んで、ミシンを初め諸道具を売りさばいて頂き、大変助かった。朝鮮人が日本人家庭に入入りしていると、密告される危険があるので、暗くなって裏口から出入りして、いつもこそそと帰って行つた。後ろ姿に、私の家族は手を合わせて感謝した。

八 ロスケの侵入、被害は時計二個

九月初め。炊事場から窓ガラス越しに前の道を

見ていたら、ソ連兵が数人一列になって我が家の玄関に向かつて来た。私は「ロスケが来た」と言つて、裏木戸から裏の家に逃げた。我が家の方を覗いたら、七、八人のロスケがうろろうろ動き回る姿が見えた。十分後静かになつて、裏から帰宅して父に聞いたら「靴履きのまま座敷に上がり込んで、手真似で『時計をくれ』と言つてあちらこちらを探すので、引き出しに入れておいた腕時計を一人に渡したら、他の奴も『ダワイ』『ダワイ』と言うので、懐中時計をやつた。すると次の奴もほしがるので、手真似でこれを持って行けと言つて柱時計を指差すと、手を振つて『いらない』と言つて帰つた。帰りがけに一人のソ連兵が、小さい甥の頭を撫でて出て行つた。鬼のようなソ連兵も、子供はかわいいんだよ」と話した。被害は時計が二個と聞いて、私はホツとした。

九 内地への帰国は未定のうわさ

家族が皆顔を合わせると、内地に帰る話になつた。しかしいつ引き揚げるのか、さっぱり分から

ない。「お金持ちの人が船を頼み、闇船で逃げたそうだ」とか、「南朝鮮に行き着く前にソ連兵に見付かつて、島に下ろされたそうだ」とか、怖い不安なうわさ話になつた。我が家の前の山田さん一家も、いつの間にかいなくなつたと思つたら、途中見つかつて帰されて来た。こつそり家を出る前に、すつかり家財を売り払つているから、帰つても何もないので困つていた。

十 父との最後の別れ

終戦から二カ月も経つと、ソ連兵の盗賊行為がいくらか取り締まられて、町の中も少し落ち着いてきた。十月三十日、秋晴れの気持ちの良い朝だつた。朝食の準備ができるまでと、私は一歳の甥を背負つて屋外に出て近所を回つた。公会堂に通じる広い道を歩いていたら、公会堂の前の市場近くに、保安隊が数人家を探す様子でうろろうろしていた。「もしや」と、私は悪い予感がして、今来た道を走つてすぐに引き返し、家に帰つた。心配したことが的中した。家の玄関に急いで入ると、

一人の保安隊員が立っていた。警察官だった父を連れに来たのだった。父は着替えをして、あれこれと自分で大きな白いリュックサックに荷物を詰め、母もいろいろと手伝っていた。朝鮮人の保安隊員が、「寒いからたくさん着て行きなさい」と言った。父は「もしかしたら、警察官は邪魔になるから早く内地に帰されるのかもしれないから、自分の物は全部持つて行く」と言つて着物まで入れていた。私は「向こうに連れて行かれても、お金があるだろう。だがそのままでは没収されてしまう」ととっさに思つて、父の眼鏡ケースの裏側を剥ぎ、折りたたんだお金を入れ、糊付けをした。もう一つは、古い紙にお金を包んで折りたたみ、糸巻きにして、リュックサックに入れた。父が出掛ける前に、私は「お金は眼鏡ケースと糸巻き……」と小声で伝えた。国民服に着替え戦鬪帽をかぶつて、すぐに出掛けようとする父に「朝食を食べたら！」と言つたが、「待たれているから、いいよ！」と言つて地下足袋を履いた。そ

の後、「火に気をつけるよ！」と言ひ残して、保安隊員の後について家を出た。「なんだかこのまま会えなくなるのではないか」と不安になり、私はまた甥を背負つて父の後を追つて行つた。「どこに連れて行くのか、行く先が知りたい」と思つた。父は公会堂に通じている広い道を横切り、西本願寺の方向へ行つた。途中何度も父は振り返つて、「帰れ」「帰れ」と合図をしたが、私はどうしても帰る気になれず、大通りを横切り武徳殿の所まで行つた。それでも私は帰る気になれず、いつまでも後を追ひ続けた。父は何回言つても私がついて来るので、立ち止まつて「帰れ、帰れ」と大声で私を叱りつけた。私も仕方なく立ち止まり、父の姿が見えなくなるまで見送つた。これが、父の姿を見た最後であつた。あのときの父の後ろ姿が、この世での父の姿の見納めにならうとは、思いもしなかつた。今でもはつきりとその情景が目に見えてくる。

数日後、「咸興の刑務所に入れられた」と聞いた

ので、母と姉たちが面会に行った。しかし、刑務所の前には大型トラックが数台並んでいて、保安隊員の監視の下で、父たちは肅々と乗せられ、そうして北の方のどこかに送られた。その後の父の消息は、何も分からなくなった。

その日から、女、子供だけの寂しくも心細い生活が始まった。北朝鮮の秋は短く、日々寒さに向かつていくので、厳寒の冬にいつ「内地に引揚げ」の知らせがきても慌てないようにと、モンペを作ったり、綿入れの手袋を作ったり、暖かい靴下を用意したりして、いつ「引揚げ」と言ってきたりもすぐに応じられるように、各自のリュックサックに詰めて準備をした。父の行方を心配しながら、母を中心に家族皆で手仕事を黙々と続ける毎日だった。

十一 山田さん地獄の「富坪」行き

そんなある日のこと、近所の「元警察官」だった若い山田さんが、「今度、ここから八里南の元の陸軍の演習場、富坪に行くことになりました」と、

裏木戸から密かにあいさつに來られた。久しぶりにお会いした山田さんは、病気があがりか顔色が悪く、痩せた体でやっと歩いて來られた様子、着ている衣類も綻びほころびていた。あまりの哀れさに座敷に上げて、下着から洋服、靴下までそっくり着替えさせて、「富坪の飯の兵舎は、寒さが厳しいと聞いています。食べ物をしっかり摂って下さい。お元気でね」と、皆で見送った。病気があがりの山田さんが、「生き地獄」と言われ、「収容された避難民の多くが死んでいる」とも言われた富坪で、無事にこの冬を越されますように祈ったが、その後どうなったか消息は今も全く分からない。

山田さんを見送って五日目から、我が家に異変が起こり始めた。まず、母が寝込んだ。続いて、姉も高熱を出して寝込んでしまった。「しまった！」と思ったが、後の祭りだった。山田さんの病気は、虱が媒介する発疹チフスだった。母も姉も高熱で、胸部に特有の発疹のぶつぶつが見られた。二人とも一カ月で峠を越し、何とか起きられ

るようになったことは幸いであつた。この間私と妹は元気で、二人の看病をしながら、買い物や台所の仕事をした。昭和二十一年になり、一月六日が妹の誕生日なので、朝鮮餅を買つて食べさせて、皆で妹を祝つてあげた。妹も異常事態の中での誕生日祝いに、感動して泣いた。

十二 悲しき妹の埋葬

その翌日から妹は、「姉ちゃん！ どうも私風邪をひいたようよ」と言つて床についた。発病三人目の妹は、自分で早く良くなりたい一心から、熱冷ましのアスピリンを飲んだ。このために、発疹が外に出ないで、内にこもり頭にのぼつて、うわ言を言いながら死んでいった。身内の突然の死に初めて出会つた私は、大変なショックだった。大分元氣になつていた母と姉から「キワちゃんの亡骸の世話は二人でします。イサ子に感染してはいけないから」と言われて、私は涙を堪えて外回りの仕事になつた。日本人世話会に行つてお棺を頼んだり、お経を上げて頂くお坊さんを頼んだり

した。

翌日、お棺を積んだ荷車を曳いた、一人の日本人世話会の人に来てくれた。病み上がりの母と姉が、弱い力でやつと妹を棺に納め、妹が「これ日本に私が着て帰るの」と大事に仕舞つていた洋服を、全部入れてあげた。母が「ごめんね、キワちゃん！ さようなら！」と言つて手を合わせたので、皆一斉に「わあつ」と声を上げて泣いた。妹のお棺を積んだ荷車には、私が一人ついて行くことになつていたが、父の友人の野村の小父さんが、「女一人では心細からうよ」と一緒についてくれた。妹を乗せた荷車は、途中の西本願寺の庭に山のように詰まれてあつた菰包みの死体五、六体を一緒に乗せて、連隊の裏山の埋葬地へ運んだ。人間の背丈ほど深く長い穴が掘られていた。その中に、菰包みの死体が底の方に並べて置かれ、石垣のように積み重ねられてあつた。土は形式的にばらばらとかけるだけ。妹もその中に埋められた。妹をお棺に納められたことが、わずかな慰めであ

った。後ろ髪を引かれる思いで、一人妹を置いて帰るのが悲しく寂しく、「いつまでもそばにいてやりたい」気持ちで泣いた。小父さんの「もうしっかり押んだ。帰ろう」の声に気がついて、小父さんの後について一目散に山を下った。元日本軍連隊の兵舎はソ連軍に接収され、銃を構えたソ連兵が立っていた。見るのも怖ろしいので、黙って前だけを睨んで通り過ぎた。

昭和二十一年二月一日妹死す。活発で明るく、だから好かれ、友達も多かった妹は、もうこの世にいない。十五歳だった。

三月になると、北からの避難民が続々と咸興の街に入ってきたので、我が家も二、三家族の難民を引き受けて、雑居することになった。難民の私たちは、生きていくために毎日仕事を見付けて働き、わずかの賃金をもらっていた。しばらくすると難民は集められ、他の收容所に連れて行かれた。

十三 父の亡霊が家族を護る

我が家は家族六人だけに戻った。そうしたある

日のこと、野村の小母さんが訪ねて来て、言いくそうにしながら、「実は、ある人から聞いた話だけれどね。お宅のご主人が亡くなったらしい。一緒に抑留された人が脱出して、伝えたのよ」と話した。「まさか父が死んだなんて信じられない。嘘だよ」と思いながらも、急に涙が流れて大声を上げて泣いてしまった。母も姉も一緒になってしばらく泣いていた。そのうち「嘘だ、嘘だ」と自分に言い聞かせ、「死んだ姿も見えないのに信じられない。いつかきつと帰って来る」と心に止めて、「どうか元気で帰って来て下さい」と祈った。

平和な今の世の中では考えられないことだが、その後私も発疹チフスに罹り、生死の境を彷徨った。最初、四十度の高熱が続いた。高熱で脳症を起こし、何日間か夢の中を彷徨った。真つ暗な闇の中を潜り、遠くの明るい世界を見付けて行くのだが、また闇にぶつかり、抜け出そうともがいて苦しんだことを覚えている。この苦しみの中で、私が寝ている布団の足元に、大島の着物を着てあ

ぐらをかいて、ずっと座り込んで私を見守っている父がいた。私は無意識で、「父ちゃんが帰っている。ほらそこに」と、うわ言を發した。母も姉も、だれもないのに、気味が悪いと思ったようだった。でも、私には本当に父が見えたのだ。きっと「私が元気になって、女、子供ばかり残っている家族の世話をして、無事内地に帰ってほしい」と思つて私を守つてくれたのだと思う。お陰で私は元気になって、引き揚げて帰ることができた。

後日談だが、引き揚げて一カ月ほどして、「延吉の収容所で一緒に過ごした」と言う別府の人が、父の遺髪と私がお金を入れてあげた眼鏡ケース、持つて帰つて下さった。大分県人同士で、助け合つていたとのことだった。最期を看取つて下さつたその人は、「収容所で病氣になったときは、いつも大島の着物を着ていた」と話してくれた。私が高熱で生と死の境を行ったり来たりしているとき、高い所から長い縄が下がってきた。上の方から「登れ！ 登れ！」とだれかが声を掛けていた。下で

は母と姉が「行つたら駄目」と叫んで止めている。私は上に行こうか行くまいかと、ひどく迷い困つたことが、全快後にもはっきりと記憶に残つていた。きっと、上の方からは父と妹が誘つたのだと思ふ。母と姉の必死の看病で、私もやつと病氣の峠を越えて、日々回復へ向かつた。

一方、病氣の最中には引揚命令が出なければ良いがと思つていたが、回復後もなかなか引揚げの知らせはこなかつた。いつでもすぐに出発ができるように、各自のリュックサックに衣類や米を入れて準備をした。我が家に最後まで居住したいと思つたが、四月に接收されてしまい、長屋の一軒に移り住んだ。この家の家族は、闇舟でこっそり南下していて、空き家になっていたのだ。終戦から半年の売り食い生活ですっからかんになつて、布団とリュックサックに簡単な炊事用具の最低の生活であつた。

十四 咸興よさらば！

昭和二十一年五月十五日。待ちに待つた引揚げ

の知らせが届いた。皆が持てるだけの物をリュックサックに詰め、午前八時に咸興駅に集合した。

駅前の広場には、二千人ぐらいの引揚日本人が集まっていた。朝鮮人の保安隊員が、「刃物類は全部前に出せ」と言った。皆は小さな鋏や小刀まで出してしまった。しばらく広場で待たされ、皆整列してホームへ連れて行かれ、貨車に乗せられた。

奥の方から詰め込まれ、自分の荷物の上に腰掛けられた。一度座つたら足も動かさない窮屈さ、それでも「この汽車が動けば、三十八度線を越えて日本に帰れるのだ」と思うと、苦しい中にも希望があつて、皆じつと我慢していた。列車はゆっくり動き始めた。

貨車の中なので、外の景色などは見えない。皆それぞれの方向に向いて、ただ無事に帰れますように、と祈っていた。

時間が経つてくると、生きている人間の集団が詰め込まれているがゆえに、生理的現象の出ているのは無理もない。トイレは無い。隅の方でと思

つても動けない。小さい子供は垂れ流しても良いが、大人で我慢できない人は、持っている空き缶にその場で済ませ、高い所にある一箇所だけの灯り取り窓から外に捨てていた。汽車の揺れで、その近くにいる者が汚物のしぶきの被害を受けて怒っていた。

十五 村山先生の家族を頼りに

同じ貨車の中に、わずか三カ月余り勤めた前津小学校で、お世話になつた村山先生家族と偶然一緒になつた。先生夫妻と女の子さん、それにお母さんを連れての四人家族。我が家は、母と姉に妹の子供と私たちの六人家族で、男の大人は村山先生一人だったので、常に先生家族と一緒に行動した。無事に帰れるだろうか？ 不安な皆を乗せて貨車は一路南下し、五時間後に停車した。元山駅だった。

「用便だ」だれかの声で、一同貨車から飛び降りて線路の側で済ませていた。私も飛び降りたが、白昼皆のしている場所では羞恥心が邪魔してでき

ない。夢中で停車している貨車の下を潜って、線路を越えて団体と離れた暗闇で用を済ませた。若い女性が、長時間の生理的現象の我慢がやっと解決してほっとしたとき、「ガタツガタツ」と、自分の貨車がゆっくり動き出していた。慌てた私は、夢中で線路に沿って走った。貨車に追いついて、がむしゃらに貨車のデッキの鉄棒にぶら下がった。幸い、デッキの扉のそばに立っていた青年が、半身を乗り出して片手を伸ばし、私の身体を引き上げた。

この一瞬の出来事は、亡き父や妹の守りのお陰で、「あのまま元山に私一人残されたら」と思い出す度に恐怖が走った。

十六 京元線を一路南下

貨車はゴトゴトと南下を続けていた。「どこまで行けるだろうか？」という不安と焦りを感じながらも、皆黙って揺られていた。ときどき、あちらこちらから「今、どこを走っているか?」「釈王寺?」「いや、三防峽は過ぎたはずだ?」とささや

く声が聞こえていた。「もう、時間的には三十八度線に近くなっているはずだが?」と貨車の奥で聞こえたとき、貨車が異様な軋みを上げて急停車した。「ここはどこ?」とざわめいたら、朝鮮保安隊員の声が聞こえた。日本語と朝鮮語の応酬である。突然、「皆降りろ! 降りろ!」と貨車の戸が開かれた。進行方向に向かって右側の方に、皆飛び降り始めた。まず、荷物を下ろして入り口の人から飛び降り、次々と続いた。貨車の周辺は、日本人難民でいっぱいになっている。このとき、ソ連兵が数人近寄って来て、分からないが何か大声でわめきだした。遂には銃の尻でたたきながら、「乗れ! 乗れ!」と言う。みんなは大きな荷物を抱えて貨車に乗った。やっとここまで来たのに、ソ連兵は「元いた所に帰れ」と言っているらしい。貨車は後戻りを始めた。「何もかも売り払い、やっと引揚列車に乗り、内地に帰れると思ってここまで来たのに」と思うと悔しい。「元の成興には帰ることはできない」と、自分に強く言い聞かせる。

団体の代表と保安隊員が内密に語り合つて、「今度はソ連兵のいない駅と駅の間で停車させる」と決まつた。貨車はゆっくり後戻りを始めてガタンと停車した。一番元気な私は、すぐに飛び降りられるように、荷物を持って入口に立つていた。我が家族五人が、私の後に並んでいる。貨車が止まつた瞬間、私は少しでも早くと、大きな自分のリュックサックを投げ下ろし、前の人に続いて飛び降りた。家族も続いたと思つたが、放り投げた大きな荷物に妨げられて、家族四人は飛び降りるチャンスを失つていた。

十七 脱出列車の悲劇

私の後に続いて、四歳の泰男君は大人の手を振り払つて、勇気を出して貨車から跳び降りた。しかし、母親に心配を掛けまいとする泰男君の行動は不運であつた。飛び降りたが、足を線路に引っかけ倒れた。突然の転倒で、まだ立ち上がれていない。そのとき、「ガタツ」と汽車が動き出し、後戻りを始めた。泰男君の足は、まだレールの上

にある。軋む車輪に轢かれて足首から下を切断され、足首がブラブラしていた。それでも気が付かないで、とことこと二、三步歩いたが「痛いよ！痛いよ！」と泣き叫んで通路に転がった。血がどンドン流れていた。少し前に貨車から飛び降りていた母親と保安隊員が、きびきびと治療にあつた。荷物の中から毛布を取り出し、それに泰男君を包んで母親に抱かせた。放心していた母親は、「ほっ」として我に返つて、我が子をしっかりと抱いた。しかし、毛布は見る見るうちに真っ赤に染まつていた。抱っこして皆の後ろについて歩いてしたが、三十分もしないうちに泰男君は真っ青になつて死んでしまった。

母親が田圃の隅の柔らかな土を両手で掘り、顔だけ出して埋めていた。そして、また皆の後ろについて歩いて来た。私は寄り添いながら、涙を堪えて黙々と歩く母親の手を強く握つてあげるだけだつた。

十八 取り残された三人の不安と嘆き

私が降りてから、貨車はすぐに動き出してそのまま元の方向に走り出した。私の家族はだれも降りていない。大声で家族を呼んだが、貨車はどんなふうに去って行った。「今から一人でどうしよう！」と思いつつながら周りをみると、今まで行動を共にしてきた村山先生の奥さんがポツンと一人で立っていた。奥さんも一人先に貨車から飛び降りていて、家族と離れ離れになったのだ。私と同じことに気がついた。いつまでも線路上に女性が三人立っていることは危険である。ソ連兵の餌食になることがはつきりしている。「早く山の方に行きましょう」と二人を誘った。村山さんはリュックサックの荷物が下ろせなかつたので、巻いた莫菴もくざう一枚だけを持っていった。「私には、お米も少々のお金もありますから、何とかありますよ。ここについては危険」と三人で山の方に急いだ。幸いソ連兵に見つかることもなく、私たちは山に入り山道を南下した。

三人とも家族のことが気になり、後ろを振り返

りながら歩いた。

しばらく歩いたころ、後ろの方から一人の男の人が、私たちに追いついた。私は、「次に停車した所で下車したのですか？」と尋ねると、「そうです。ほとんどの人が貨車から降りて、皆さんの後から追いついて来ますよ」と言われて、私たちはホツとして喜び合った。離れ離れになった家族が、後ろから追いついてくれますように願いつつながら、振り返り振り返りゆっくり歩いた。

一九 家族との再会

三時間ほど経って、山の中で待ちに待った家族と再会した。村山先生は年老いたお母さんをおんぶして、荷物を持った幼い子供さんの手を引いていた。私の家族も、みんな元気で無事だった。

夜が近付いてきたが、日本人難民が朝鮮人部落に入ることは拒否された。伝染病持ちの集団を断るのは当然で、近所の草原で一夜野宿することになった。北朝鮮の五月は梅雨期はまだ遅く、これは日本人難民には幸いで、各自がそれぞれに持ち

物を地べたに敷いて、夜空の下で眠る一夜になった。しかし、寒さは身にしみた。近くの部落の朝鮮人は、私たちのごろ寝が珍しいのか、周囲をうろろと歩き回っていた。私はなんだか落ち着かず眠れなかったが、そのうちに昼の疲れが出て、少しは眠ったようだった。

翌朝は、早めに木の枝を拾い、にわか作りの竈に飯盒をかけて、皆で分け合って急いで食べた。朝食を済ませての出発である。いつの間にか壮年の方が団体のリーダーになった。集団がなるべく目立たないように、山道を選んで南下した。それでも、時々はどうしても朝鮮部落の中を通らなければならなかった。部落によつて村人の態度に大きな違いがあつて、冷たくされたり暖かくされたり、敗戦国民の惨めさを痛感させられた。ひどい所では、日本人難民が疲れ切つてぞろぞろと歩く道路の両側に、朝鮮人がずらりと並んで、一人一人の荷物を引っ張り出し、めぼしい物を強奪した。物資不足が尾を引いて、主として衣類が狙われた。

朝鮮の子供たちは、日本人難民の子供が持つていた学用品を取り上げていた。どんなことをされても、悪口を言われても、ただただ黙つて歩いて朝鮮部落を通り抜けようと、歯をくいしばつて前の人に続いて黙々と歩いた。

二十 自ら捨てた婦人の死

ある村を通りかかった時のことである。村長らしき人が、「この奥の山の中に、日本人の女が一人置き去りにされている。死んでいたら、自分たちで世話をし埋めてあげるのだが、まだ生きているので、ここから連れ出してほしい」と申し出た。難民の中の数人の若者が、村長の手助けを受けて、応急の担架を作り、病人を乗せて歩き出した。病人は四十歳代の女性で、既に衰弱しきつて痩せ細つていた。「ここまでの脱出行の日々は、子供たちが交替で連れて来てくれたが、歩けなくなつて、これ以上子供たちに負担をかけると共倒れになると考えて、自分から山の中に残りました」と、細かい声で語つた。

若者の運ぶ担架は、後になり先に立ったりして進んでいたが、いつの間にか見えなくなっていた。その後、担架の婦人や運んでいた若者のことが心配でしたが、とうとう堤防の横で亡くなられたそうでした。「自分の身だけでも大変なだけに、仕方が無いよ！」と、皆で若者を慰めたとのことです。南へ南への行軍は続きました。ある日には、夕方朝鮮部落に入ると、「大変だったでしょう、泊まって行きなさい」と親切に声をかけられて、村の家々の暖かいオンドル部屋に泊めてもらいました。翌朝、お礼を言つて出発しようとしたら、母の新しい地下足袋が無くなっていました。戦争中には地下足袋は配給品で、この田舎の村人には貴重品だったと思う。泊めてもらったお礼だと諦めたが、母の履物でしたから困っていたら、村山先生が余分に持っていた草履を貸して下さり、大変助かった。それから、昼間はソ連兵に見付からないように山に潜み、夜になると歩いた。山も野原も甘い香りのアカシヤの花が、避難民の現状をポーッと忘

れさせてくれた。

姉の子で一歳になる靖人は、姉の背中に負われたままなので、「おんりねんね。おんりね」と下におろせと泣いて、姉を困らせた。一年生の弟芳朗も、ランドセルの代わりに大きなリュックサックを背負い、母に手を引かれて歩き、四年生の妹イツ子は、大人に混じつてたくましく歩き続けた。

二十一 国境三十八度線に到着

それから数日後のある日、「今夜は三十八度線を夜中に突破するぞ！」との連絡があった。それまでに、皆腹ごしらえをして待った。「静かに！ 声を出すな。ただ前の人の後ろについて歩け！」 厳しい連絡に、皆緊張して歩いた。途中、河に出会って一本橋がかかっていた。暗くて下が見えないことが幸いだったが、私の前を歩いていた弟が足を踏み外したのか、「あっ！ あっ！」と声をあげた。後ろの方から「声を出すな」と叱る声が広がる。弟もそばの母の手にすがる。恐ろしく緊張

した歩行である。ただただ闇の中を、前の人に続いて歩くだけ。黙って歩けばよかった。

先頭が、道路の中間に鉄道枕木で通行止めの障害物に突き当たった。

二十二 国境での最後の身体検査

これが三十八度線の標識と分かった。近くにソ連兵の歩哨詰め所があるらしい。四人のソ連兵が出て来た。懐中電灯を持たないらしく、マッチの灯りで近づいて、我々難民を見て回る。皆二列に並び、前の方から一人ずつ荷物の検査と身体検査を受ける。「荷物は全部出して、見せろ！」と言われて、検査が始まった。検査するソ連兵は、欲しい物品を暗い中でも見付け出して後ろに投げる、靴を脱がせての入念な検査である。現金は、見付け次第取り上げられた。幸い我が家では、分散してリュックサックに縫いこんでいたから、被害はなかった。またリュックサックの中のめぼしい物は、ここまでに何回も検査を受けてほとんど没収されていたので、何も被害は無く終わった。

前の方で泣き叫ぶ女性の声が聞こえてきた。「お金を胴巻きに入れていたのを見つかつて、そっくり没収されたらしい」「返せ！」「返さん！」とひと騒ぎになって、結局はたたかれ損になってしまった。遠くで「赤ちゃんのオムツの中に入れてよ！」の声が聞こえた。

検査が一応終わると、「行け」と言うロスケの一声で、国境三十八度線を越えた。呆気ない国境線越えに思えたが、取り巻いている恐怖と不安はまだ続くような気持ちで、皆軽くなった荷物を抱えると、後も見ずにどんどん走ってこの場から立ち去った。皆は、どこか分からなくても皆が安全地帯である、と身体で感じ取っていた。もう大丈夫という安心感は、皆の顔の緊張を緩め、心の硬さをほぐして明るくした。一団が到着して腰を下ろした所は南朝鮮の汶山で、五月二十五日であった。

二十三 汶山から釜山へ

北の方向の野道から、日本人難民の団体が次々に米軍墓地に入って来た。迎える米兵の笑顔に、

ホツとした気分で近寄る。半年前までは「鬼畜米英」と叫び、恐れていた兵隊である。今は優しい神様に見える。

早速、虱の駆除消毒が始まった。咸興からの団体は二千人であったから、全員が終わるのに時間がかかった。早く着いた者も後から続く者も、今は無事三十八度線を越えた安ど感と、お互いの無事を喜ぶ気持ちが集団にあふれていた。

汝山から貨車にぎっしりと詰め込まれて、南へ南へと南下した。京城では、日本人世話会にお世話なつて一泊し、次の日食事を撰つて一路釜山へ向かった。誰もが、少しでも早く日本内地に帰りたい一心であった。

釜山駅に列車が入ると驚いた。既に各地からの難民で満員である。皆長旅に疲れて、座り込んで乗船の日を待っていた。私たち北朝鮮からの難民が、一番みすぼらしく哀れであった。そのためか、収容所には一泊もしないで、すぐにその日の夜乗船することができた。船底に入り荷物を降ろし、

「ああ、やっと船に乗れた」とべったり座り込んで、船の動きを待った。船員の計らいで、船底から上の客室に移してもらった。「これで本当に日本に帰れるのだ」と、家族一同実感が嬉し涙と共に、手を握り肩を抱き合つた。

二十四 六月十三日仙崎に上陸

船が動き出した時、デッキに上がり、だんだん遠ざかっていく釜山港に、私は別れを告げた。久しぶりに落ち着いた気持ちになって、月光に輝く航跡に見とれた。在朝鮮時代の苦難と決別した気持ちになつて、船室に入り家族と一緒にゆつくり深い眠りについた。

翌日五月二十九日、船は仙崎港の沖合いに停泊した。緑豊かな日本の山々を眺めて、自然ににじむ涙にしばし濡れながら、感無量であった。船内で死亡事故が次々発生。発疹チフスの疑いで上陸禁止となり、二週間留め置かれた。この間、食糧は仙崎港から小船で運ばれていた。一人一個のお握りと漬物である。このわずかな食糧が、明日の

希望を与えてくれた。だれ言うともなく「餌船到着」と叫んで、日に三回一同が喜んで迎え、そのときのお握りと漬物のおいしかったことが忘れられない。姉が幼い子供を抱えていたので、リュックサックの底に残っていた米を集めて、船員さんにお願ひして「炒り米」にしてもらった。優しい船員さんの心尽くしで、靖人のオッパイ代わりができた。この「炒り米」が、船中二週間の子供たちのおやつになった。

ただ、何もしないで過ごす二週間は大変退屈であつた。こんなとき、慰問の演芸会が行われ、このとき聞かされた「リンゴの歌」の明るい希望に満ちたリズムは、引揚者皆の心を捉えた。だれもが即座に覚えて、いつも小声で合唱した。

六月十三日、正式に医者 の 検診を済ませて日本本土に上陸の日がきた。仙崎の港に大人も子供も皆次々に上陸して、「援護局」の人々から慰安の言葉と食糧を頂いた。咸興を出てから約一カ月間、脱出の苦勞を共に過ごした人々と今日でお別れと

なつた。相互に別れのあいさつをして駅に向かい、私共家族は亡き父の故郷、大分市に向かつて出発した。